2019年４月。どこにでもいそうな一人の地方公務員が、仲間の呼び掛けに応えて政治の道に踏み込んだ。それまで内に秘めていた熱い想いを実現するべく走り出し、日頃から大切にしてきた多くの仲間とともに、単組役員から京都府議会議員を経て笠置町長として『生まれ故郷』のために飽くなき挑戦を続ける男の物語。

単組の執行委員長から府議・町長へ

── 仲間たちとともに歩んだ奇跡・山本あつし物語 ──

京都府本部／城南衛生管理組合労働組合　川戸　英美

1.　プロローグ

2018年８月17日（金）。「なぁ、京都府議会議員選挙に挑戦しないか？」

青年部時代からともに組合活動に汗していた仲間の囁いた一言が、八幡市職労の山本あつしを「自治労組織内：京都府議会議員～笠置町長」への道と町づくりへの挑戦物語にいざなうことになるとは、この時、周囲の者はもちろん、当人も知る由がなかった。

山本あつし笠置町長

2.　何かが舞い降りた

その頃、京都６区選出の山井和則衆議院議員は「現役世代かつ行政経験のある人」、「木津川市・相楽郡選挙区に所縁のある人」、「京都府議会議員にふさわしい人物」を探していた。しかし当時、民主党から民進党を経て「立憲民主党」と「国民民主党」へ分党するなど、諸条件が悪く候補者の選定は全国的にも困難を極めていた。まして、公務員を辞めて立候補する人材を探すなど雲を掴むようなものとして、連合京都南山城地協や自治労南部ブロック協の各単組は山井衆議院議員の相談を都度お断りしていた。

そんな中、運命の８月17日がやって来る。自治労京都府本部執行委員会に出席するため会議室に着席している山本の顔を見た瞬間、青年部時代からの仲間の脳裏に「バンザイしている幻影*?!*」が舞い降り冒頭のセリフが口をついた。

山本からの答えは**「僕もそう思っていました」**。気持ち良い即答だった。

3.　不可能の壁を突破せよ！～怖いもの知らずの挑戦

そこから翌2019年４月の統一自治体選挙までの道のりはトントン拍子に進んで初当選*!!!*　な、訳は無く、本レポートにすべてを書き表すことが出来ない苦難の連続だった。

その中で主な取り組み内容を記すと、

①　国政政党（立憲民主党・国民民主党等）間の調整・協議・探り合い
②　連合京都をはじめとする産別、労組へのあいさつ、議員フォーラムへの加入
③　前府議会議員との引き継ぎ、後援会の理解を得るため説明会へ出席
④　部落解放同盟京都府連、同山城地協、各支部へ協力要請

⑤　山本以外の身近な人物の出馬取り止めにむけた説得

など、地域・地元の理解を得るために奔走する日々だった。そのような状況下、仲間たちは、山本一人だけでは当選がおぼつかないとの判断から、木津川市・相楽郡選挙区で長年、組織内議員を輩出してきた情報労連京都地区本部に協力をお願いした。ただ当初、この２産別合同の選挙協力体制についてベテラン筋を中心に「実現は難しい。」との声が大勢だった。しかし、ここで山本の粘り強い姿勢が奇跡を起こしていく。

山本の胸の内には、1990年代からこの間、民主党政権の誕生～転落や野党の離合集散も見聞するなか、「住民感覚、住民の生活を中心に据えた政治の現出とその原動力こそ、連合結集と産別相互の協力にある。」との想いが大きくなっていた。改めて「この選挙で大きなうねりを作る必要がある、自分がその先頭に立つ。」との覚悟で、時には京都府本部や山井衆議院議員事務所にも協力を得ながら、山本と仲間たちは一緒に何度も情報労連の三役、退職者会の方々と話し合いを重ねた。

福山哲郎参議院議員と街頭で訴える山本

情報労連も山本が連合京都南山城地協の活動に精力的に取り組んでいたことと、一緒に地協運動に参画していた誼みがあること等を評価して快諾。ここに他選挙区では近年、例を見ない自治労・情報労連２産別合同の選対が実現した。

山井和則衆議院議員と雨のなかの街宣

さらに、立憲民主党・国民民主党双方に推薦を求めて精力的に働きかけを行った。こちらも当初は「絶対ムリ。」「不可能だ。」「大変厳しい。」の反応。そして、口を揃えて「私どもの党の公認で立候補してほしい。」の答えしか返って来なかった。それでも山本は「若い時から山井和則・福山哲郎を憧れの眼差しで見つめてきた。」「山井さん・福山さんの力になりたい。一緒に地元のために活動したい。」「二人と力を合わせて選挙をたたかいたい。だから『両党の推薦』しか答えは要らない。」「あなたたちは、私ひとりの気持ちにも応えられずして、１億２千万人の日本国民の期待に応えることができるのか？　再考を求める。」と強い想いを伝えた。

以後、告示日ギリギリまで神経をすり減らすような折衝が続いた。朝夕関係なく京都市内、自宅、時には東京に出向いての話し合いは枚挙にいとまがない。このように周囲が紆余曲折を繰り返すなか、並行して一人、駅立ちや地元への挨拶まわりを始める山本。そのひた向きな姿を通していつの頃からか、両党関係者の中に「山本あつしを当選させたい」との声（認識）が日増しに大きくなっていった。

この機を逃すまいと仲間たちが吠える。「日本の歴史が動く時、その舞台は京都だ。今こそ両党の共闘を実現し新たな歴史を、枠組みを、私たちから全国へ発信するべきだ。」

福山哲郎参議院議員（本人の左側）、松岡保前府議（本人の右側）らと初当選のバンザイ

かくして、不可能の壁は突破された。

『立憲民主党公認・国民民主党京都府連第６区総支部支持』という全国的にも例を見ない両党の連携体制が整った。

「２産別合同の選対」「立憲・国民両党の連携体制」を実現できたのも、ひとえに山本の一度決めたらブレない小気味良い「頑固」さと、誠実な人柄の成せる業といえる。

ブレない不屈の精神力と一度決めたら判断を覆さない頑固な性格のおかげで、仲間たちも「山本の名代」として安心して力を発揮できた。この怖いもの知らずで、我武者羅に走り切れたことが2019年４月７日の投開票日の結果となって表れた。「泡沫候補」の前評判を跳ねのける9,730票を得て山本は見事に初当選を飾った。

4.　京都府議会議員として～ふるさとへの想い

ここで、笠置町について紹介する。笠置町は京都府南部に位置し、東は南山城村、西は木津川市、北は和束町、南は奈良市に接する。人口は996人（2024年１月１日現在）と京都府下で最小人口規模。厚生労働省の国立社会保障・人口問題研究所（社人研）が公表した地域別推計人口（15～64歳）の減少率が最も高い自治体とされている。町内には鎌倉時代末期に後醍醐天皇が行宮を構えた修験道の根本道場・山岳信仰の中心地たる笠置山を有し、現在は京阪神からボルダリングやキャンプ場などに多くの観光客が訪れ、自然・レジャーを中心に賑わいを見せている。一方で新生児の出生数がゼロになった年もあり、若者の定住化、人口減少、財政基盤の確立が大きな課題となっている。

笠置町のＰＲキャラクター
「笠やん」

山本が京都府議会議員となって初めて一般質問に取り上げたのが、1,400人（当選直後の人口）の町「笠置町」の課題だった。これ以後、彼の活動の主は「笠置町」に置かれることになる。なぜか、それは「生まれ故郷」への想い。生まれ故郷の笠置の町を何とか元気にしたい。ただその一念だけ……

と、言っても山本が所属する選挙区は笠置町含め１市３町１村あり、各自治体は、それぞれの課題に直面している。京都府議会議員として各首長と京都府知事と国会議員の橋渡し役として日々、謀殺されていった。

そんな忙しい折にふと口にするのが「最後は笠置町長で終わりたいんですよね。」だった。その当時、仲間をはじめ周囲の者は、ほのぼのとした感触で山本の発言に頷いていた。その情熱がマグマ級だと気

づくのは、2024年２月のことである。

5.　洞ヶ峠を越えさせない～議員秘書として関わった八幡市長選

１期４年はあっという間に過ぎ、2023年４月に２期目の当選をめざして選挙戦に突入した。ただ、前回と違い大阪府下を中心に着実に力を伸ばしてきている維新旋風が吹き荒れる逆風下と、２期目のジンクス（４年間の実績が問われるため、一般的に厳しいと言われる）を跳ねのけなければならない厳しい情勢下での取り組みとなった。

２期目の当選をめざし訴える山本（左は山井衆議院議員、右は泉ケンタ立憲民主党代表・衆議院議員）

手堅く票をまとめてくる自民候補、空中戦で浮動票を獲得する維新候補に対し、山本は過疎地域を中心に対話による地上戦を徹底的に行った。見える政治、身近に感じてもらえる府議、過疎地域（東部）から新興住宅地（西部）へ支持層のトリクルダウンを図る戦術を徹底した。

激励に笑顔で応える山本

結果、前回から2,475票上積む12,205票を獲得しながらも、維新候補に153票差で逃げ切られ涙を飲むこととなった。この惜敗の結果に周囲からは早々に４年後の再起を願う声が上がった。当然、私たちもそのつもりであり、山本も山井和則衆議院議員秘書として地元活動を続ける道を選択した。

秘書として、府議時代同様に、いやそれ以上に地元の各選挙、行事への参加、あいさつ回りに謀殺されていた。そんなある日、八幡市の堀口市長が任期満了を待たずに辞意を表明、11月に市長選が告示されるとの一報がもたらされた。第二のふるさとても言うべき八幡市の市長選に加わる山本。こうして後に「全国最年少の女性市長」と注目を浴びる川田市長候補と日本維新の会公認候補との事実上の一騎打ちの火ぶたが切られた。この八幡市長選は、2024年２月に行われる京都市長選の前哨戦と位置づけられた。大阪から京都へ進出をめざす日本維新の会が、八幡市長選を足掛かりに出来るのか、それとも西脇・京都府知事与党（自民・公明・立憲）が跳ね返せるのかに世論の注目が集まった。

西脇京都府知事、山井衆議院議員、連合京都議員フォーラム議員、連合・自治労京都組合員らと八幡市内一円をピンクジャック

山本と仲間たちは一貫して、「革新の火を最後まで守った先人に恥じないたたかいをする。」「維新に洞ヶ峠※を越えさせない。」「そのためには、（動きの悪い自民・公明に代わって）立憲と労組が先陣を切る。」と意思統一の上、オフィシャルカラーを「ピンク」に指定し、毎週末、「ピンクジャック」と称して市内主要交差点で街頭行動を中心にフル稼働した。

当初は知名度で後れを取る厳しい情勢であったものの、組織固めと街頭行動等によって徐々に差を縮める展開に。終盤、維新陣営が吉村代表らによるテ

コ入れを図ったものの、こちらは維新所属の市会議員を味方に引き込むなど、川田翔子新市長誕生に貢献した。

6.　決裂～笠置町長へ

八幡市長選を勝利のうちに終え、いよいよ京都市長選を目前に控えた2024年１月16日（火）、山本から「笠置の地元から町長選へ出馬してほしいとの声が上がっている。自分としては断ることができない。挑戦してみたい。理解、協力を。」と耳を疑う言葉が飛び出した。「山本さん、何を言っているの？次期、府議選にむけて頑張るのでは無かったのか？　理解できる訳などない。府議選なら全力で協力できる。」と仲間は一蹴した。

この日を境に、京都市長選の取り組みと並行して、いや、市長選後も山本と周囲の仲間たちの主張合戦が続く。時には京都府本部や連合京都の皆さんを心配させるぐらい、かつてのゴールデンチームは「笠置町長になってふるさとを守りたい（山本）」「１万２千人以上の投票を頂いた有権者の期待を踏みにじるのか（事務所スタッフ）」などと主張を曲げず約40日間、龍虎相搏つような激論が交わされた。

２月25日（日）、「どうしても出る。**地元を離れた人が戻ってくるような町にしたいのです。**皆さん、力を貸して下さい！」と、笠置への並々ならぬ想いを語る山本を前に、「決裂だ。組織は応援できない。」と述べ山本の前から去っていく仲間もいた。

こうして、山本は町長選の準備に入っていった。

３月12日（火）町長選の告示日。自治労や連合京都の推薦もなく、選挙カーの運転手にも事欠くありさま。地元の方々は「顔が障す」と事務所にも近づかない。選挙をたたかえるのだろうかと、不安がよぎるのをよそに２日目から古巣・八幡からボランティアとして一人また一人と駆けつけて体制を整えていく。気が付けば、府議選時の仲間が勢揃いしている。最終日には山本の活気に満ちあふれた声と姿が笠置町内を飲み込んでいた。

近隣首長、議員らに囲まれてバンザイする山本

３月17日（日）、462票を獲得して初当選。近隣の首長や議員、仲間たちに囲まれバンザイする山本。『山本の一度決めたらブレない小気味良い「頑固」さと、誠実な人柄の成せる業』がここでも遺憾なく発揮された。

7.　笠置町長の挑戦

前述のとおり、人口が千人を切る町、笠置町。山本はネガティブに受け止めていない。「町の人、一人ひとりと直接、お話しができるんですよ。こんな幸せな町長って、他にいます？」とポジティブに捉える。

「最後は笠置町長で終わりたいんですよね。」

有言実行を形にすることは中々できるものではない。それをサラッと実現した山本。５年８か月前まで八幡市の職員で自治労組合員だった男が、胸に秘めた想いを叶えるために公務員という「安定した職」を捨て、未知の世界へ飛び込んだその行動力に心から敬意を払う。また、ともに貴重な経験と奇跡の道程を歩ませてもらったことに感謝申し上げる。

今後は、笠置町職員組合の仲間とともに、比類なきその実力で笠置町を素晴らしい自治体へ導いて欲しい。山本あつし町長の手腕が無限大に発揮されることを期待する!!

山本あつしの挑戦はまだまだ続く。これからも大切にしてきた多くの仲間とともに。

8.　エピローグ～誰のため、何のため

地方自治の課題（ニーズ）が多様化する今、私たちに必要なのは「決断と行動」するパワーだ。

地域公共サービスに従事する仲間で構成する自治労は、本レポートで取り上げた山本町長と同じく、いや、それ以上に地域に愛着を持ち、現場が抱える課題に果敢に取り組んでいる人材が多い。しかし、現状の枠組みで突破できないと感じた時、ある人は「行政のプロ」として、ある人は「政治家」として、ある人は「個人事業主」として道なき道を進んでいく。これらの道を歩むにあたり共通する要諦は、「誰のため、何のため」ではないだろうか。それは地域・現場にどれだけ寄り添うことが出来るのかに尽きる。山本町長は、私たちに『「誰のため、何のため」＝「笠置町民と一緒に、ふるさとを元気にするため」』と、一つの道標を示してくれた。

そこに暮らしている住民が存在する限り地方自治・地域公共サービスの役割に終わりはない。「原点は現場」の心を忘れず、決して日和見することなく、信じる仲間と助け合い、地域から職場から常に変化を遂げていこうとするチャレンジ精神を持った人材が次々と現れることを希求してやまない。そして、そんな人材、仲間はきっと今も身近にいる。私たちは、「現場の力を声に」するため、これからも第二第三の山本を創っていきたい。

※　洞ヶ峠【ほらがとうげ】京都府八幡市と大阪府枚方市の境にある峠。1582年に明智光秀と羽柴秀吉が山城国山崎において激突した天王山の戦いで、明智・羽柴の双方から加勢を依頼された大和の大名・筒井順慶が、山崎と淀川を挟んだ洞ヶ峠まで兵を進めながらも最終的にはどちらに付くか日和見をしたとの伝承から、日和見することを「洞ヶ峠を決め込む」「洞ヶ峠」と言い慣わすようになった。